

昭和初期における手取川扇状地の農業

Agriculture of the Tedoru Alluvial Fan, Ishikawa Prefecture, in the early stages of Showa period

高橋 敦子 Atsuko TAKAHASHI

北陸地域の農業は、扇状地の自然灌漑を利用した稲作が中心で、冬季積雪のため水田単作農業を特徴とする。農業地理学における北陸の農業についての研究は、農業水利の管理運営を分析した研究が多く、実際にどのように水を利用し、農業をおこなっていたかという研究は少ない。ひとくちに水田単作農業といっても、多様性が認められるのではないだろうか。以上から本研究は、扇状地の農業の地域的特徴について明らかにすることを目的とする。研究対象地域は、北陸で最も模式的な扇状地の一つである手取川扇状地（石川県）をとりあげた。研究対象時期は、昭和の初期を設定した。研究方法は、扇状地の地形の特徴及び用水条件を考慮し、右岸地域の7本の用水（七ヶ用水）のうち1本とりあげ、用水慣行上の区分である扇頂部に位置する上郷、扇中部に位置する中郷、扇端部に位置する下郷地域より1村ずつ合計3村を選び、農事暦を作成し比較考察した。

手取川扇状地は、白山山系の大汝峰（2680 m）を水源とした手取川より形成され、面積約100 km²、扇頂から扇端まで最長15 km、標高差約75 mである。土壌条件は、右岸中央部においては、礫質土壌が多く分布するが、末端地域では、湧水及び地下水利用の地区が存在する。手取川の流況特性は、日本海側の気候の影響を受け、4、5月に最大流量を示し、8月に最低流量となる。

手取川扇状地の農業の動向は、藩政期より稲作中心で、その傾向は時代を下るほど強まっていた。七ヶ用水の管理運営については、管理者や組織形態に変化がみられたが、各集落の慣行は、藩政期より戦前までほとんど変化がみられなかった。

3村の農事暦を作成し、比較考察を行ったところ、いくつかの共通性と差異性を見出すことができた。

共通する事柄として、田植え時期があげられた。手取川の流量が最大となる4月に田の耕起が行われ、梅雨前の5月に一斉に田植えが行われていた。これは自然面の影響を受けたものであった。種籾の選定法（塩水選）、中耕方法、除草方法、病虫害防除の方法、二毛作の方法及び作物、農具も共通

していた。これらは、勸農政策による県と各村の農談会による指導により、扇状地の村に広まったものであり、社会経済面の影響を受けていた。

差異としてあらわれた事柄として、まず土地の状態は、乾田が主であったが、扇端部では湿田がみられた。田の大きさは、扇頂部では用水の本数の多さと資金面から耕地整理が遅れ、大小さまざまな大きさの田がみられた。このため農作業の違いもみられた。馬耕に使用する馬の借先は、扇頂部は白山麓、扇端部は福井県であった。田植時の一株の苗の本数は、扇頂部において、低温のため多く植えられた。畑は主に水田を利用したが、扇頂部は山も利用した。農閑期の作業は、主に藁仕事であったが、扇端部では山の本の搬出作業もあった。これらの差異は立地場所による影響を受けたものであった。さらに立地場所からくる用水条件は、とくに水不足の扇端部において影響した。扇端部の田の耕起は、扇頂や扇中部の耕起が終わってから流れてくる水を利用するため、時期が遅れた。種籾の種浸し場所は、扇頂部や扇中部では用水の堀を利用したが、扇端部では、湧水や桶に水をいれ利用した。また苗代も村内の用水条件の良い場所に集積した。また川掃除などの用水管理は、扇端部は水利権が弱く上流の村の作業も行っていた。米の品種は、扇端部では、稲の成長が夏の渇水期と重なるのを避けるため早生種を栽培する割合が高かった。

以上から、同じ扇状地上にあっても地域ごとに多様性が認められた。各集落は地域の自然をたくみに利用し、地域にあった農業を行っていた。